

当院における無痛分娩について

無痛分娩とは

陣痛による痛みと赤ちゃんの出てくる時の痛みを抑えることで落ち着いて出産できるようにするお産のことをいいます。

これまで世界中で様々な種類の和痛分娩や無痛分娩が行われてきましたが、当院では最も安全性が確立され尚且つ痛みをとる効果もある硬膜外麻酔併用無痛分娩を行っております。

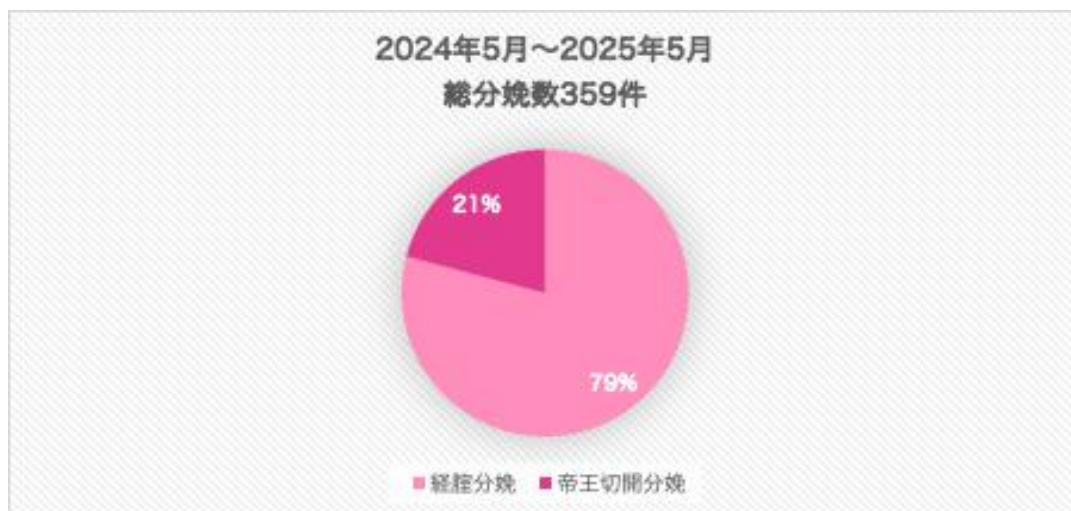
無痛分娩実績

代官山バースクリニックは2024年5月に開院した新しいクリニックです。2025年5月末までで359の方が出産されております。

その内経膣分娩では284件、帝王切開分娩は75件、経膣分娩のうち無痛分娩は270件（95%）となっており、多くの方が無痛分娩を選択されております。

また、当院では、初産婦・経産婦問わず、患者様の希望・状況により、i)計画無痛分娩 ii)陣痛発来後の無痛分娩 iii)自然分娩希望であったが無痛分娩への変更の全てに対応しております。





当院の無痛分娩の特徴

当院の産婦人科医並びに助産師は、大学病院等の高度医療施設で無痛分娩を行っていた熟練したスタッフになります。また、麻酔科専門医も在籍しております。

1. 24時間無痛分娩対応可能。
2. 産婦人科学会における無痛分娩の安全な提供体制構築指針に沿った無痛分娩を実施します。
3. 計画無痛分娩・自然陣痛発来後の無痛分娩どちらも可能です。
4. 普通分娩予定の方の途中からの無痛分娩への切り替えは、可能な限り対応致します。

無痛分娩の事前準備

無痛分娩を希望される方は以下の事項をご留意ください。

- ① 妊娠 34 週ごろまでに当院無痛分娩教室の受講をお願いいたします。
- ② 外来にて無痛分娩同意書を提出して頂きます。
- ③ 計画分娩の場合、入院日の決定をします（妊娠 39 週ごろ目安）
- ④ 採血にて、血液凝固異常がないことを確認します。

無痛分娩を行えないケース

いかに該当する場合、無痛分娩を行えないことがあります。

- ① 血液検査上、血液が固まりにくいと判断された場合
- ② 母体感染症
- ③ 極端な肥満
- ④ 脊椎疾患などの既往（二分脊椎など）
- ⑤ 経膈分娩が困難と判断される場合
- ⑥ その他、医学的理由により、胎児娩出を急ぐ場合

無痛分娩のメリット

- ① 陣痛の影響により妊婦さんの血圧が上昇したり、過呼吸やパニック状態になることがあります。このような状態が続くと、胎盤への血液の流れが少なくなってしまう、胎児にストレスがかかり、元気がなくなってくる場合もあります。
無痛分娩により痛みをコントロールすると、母体の循環、呼吸の安定が得られ、ストレスが軽減することで赤ちゃんのストレスの状態も安定します。
- ② 体力の温存
出産は基本的に長時間かかりますので、痛みのないお産は母体の基礎体力を維持し、産後の回復も早く良くなります。
- ③ 家族とのゆっくりとした時間を過ごせます
痛みのない分娩経過のため、ご主人やご家族とゆっくりと過ごす事が可能で、思い出深い出産を迎えられます。

無痛分娩のリスク

① 血圧変化

硬膜外麻酔薬投与により、母体の血圧が下がることがあります。適宜静脈からの点滴や体位変換などで対処します。

② 発熱

硬膜外カテーテルの挿入により、母体の発汗低下や呼吸の影響によると考えられる発熱が起こることがあります。何らかの感染とは異なるため、直接的に分娩に影響することはないとされます。

③ 微弱陣痛

麻酔薬投与により子宮収縮が弱まりすぎると、微弱陣痛といって子宮の収縮が弱すぎる状態となり分娩進行に影響します。適切な麻酔投与にコントロールすることで防げますが、しばしば起こり得ます。分娩進行に必要程度の適度な子宮収縮を起こしていきます。

④ 頭痛

50～100 人に 1 人程度とされますが、局所麻酔薬の影響により頭痛が起こることがあります。多くは 1 週間以内に軽快します。頭痛がひどい場合は、治療法がありますので、遠慮なくおっしゃってください。

⑤ 神経障害

腰痛や下肢神経障害は稀に報告されていますが、無痛分娩との直接的関係は証明されておりません。

⑥ 下肢運動障害

カテーテルがくも膜下腔という、硬膜外腔より深い位置に入ると、呼吸抑制や下肢運動障害が起こり得ます。

⑦ 麻酔薬アレルギー

⑧ カテーテル遺残

⑨ 耳鳴り・めまい

当院における体制について

当院では無痛分娩連絡協議会(JALA)の規定に基づき、無痛分娩麻酔管理者を選定し、安全な無痛分娩の実施に努めています。

急変時の対応として、麻酔器・人工呼吸器・呼吸補助機器・AED・その他各種薬剤並びに十分な人員を配置しております。

よくあるご質問

① 妊婦さんの意識ははっきりしていますか？

全身麻酔とは異なり、硬膜外麻酔を用いますのでお腹から下の痛みだけを麻酔し、妊婦さんの意識ははっきりしています。

② 分娩への影響は？

分娩第一期に影響はありませんが、分娩第二期はやや長くなることが示されています。1時間ほど長くなることは許容範囲とされます。赤ちゃんが元気かつ妊婦さんの痛みがコントロールできていれば問題ないとされます。

陣痛の影響により妊婦さんの血圧が上昇したり、過呼吸やパニック状態になることがあります。このような状態が続くと、胎盤への血液の流れが少なくなってしまう、胎児にストレスがかかり、元気がなくなってくる場合もあります。無痛分娩により痛みをコントロールすると、母体の循環、呼吸の安定が得られ、ストレスが軽減することで赤ちゃんのストレスの状態も安定します。

③ 赤ちゃんへの影響はありますか？

赤ちゃんへの影響はほとんどありません。全身麻酔の場合は赤ちゃんにも麻酔がかかり眠って生まれてきたり、少し元気が無かったりしますが、当院の硬膜外麻酔で使用する麻酔薬は局所麻酔薬で母体への血中濃度も非常に少ないため、赤ちゃんへ麻酔の影響の心配はほとんどありません。

④ 産後の回復は早いですか？

出産は基本的に長時間かかりますので、痛みのないお産は母体の基礎体力を維持し、産後の回復も早く良くなります。

また、痛みのない分娩経過のため、ご主人やご家族とゆっくりと過ごす事が可能で、思い出深い出産を迎えられます。

⑤ いきめますか？

痛みをコントロールした状態で、しっかりといきんで出産できます

痛みもないので出産時には産婦さんが冷静にお産に臨む事ができます。足に力が入らなくなるような強いお薬は使いませんので、しっかりと上手にいきむことも可能です。